

## 救い主を、自らの夜に見つける

牧師 山本 護

「主の天使が夢(ヨセフの)に現れて言った。〔～マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである〕(マタイ 1:20)。「東方で見た(占星術学者らが)星が先だって進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった(2:9)。

「羊飼いたちが野宿しながら、夜通し羊の群れの番をしていた(ルカ 2:8)。天使から救い主誕生の声を聞くと、彼らは闇の野を走って「マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた(2:16)」。



クリスマスは夜の場面が多い。「その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである(ヨハネ 1:9)」。これもまた夜のイメージで私たちはキリストの「光」を注視します。その半面、人間側の「夜の闇」を罪のひとつで十把一からげに片づけてしまい、もったいない気がします。

埴谷雄高はこう言いました。「私たちがすでに古くから知っているごとく、闇こそは想像力のつきせぬ巨大な母体であって、そこにおいて想像力を羽ばたかせる最大の特性は、無限と、変容、の二つにほかならない(準詞集)」。

寒村ベツレヘムの片隅で起こったほんの小さな出来事が、「夜の闇」からの想像力によってクリスマスとして特別に変容され、「世に来てすべての人を照らす光」となりました。私の闇は私にとって特別なものであり、あなたの闇もあなたに特別でしょう。そしてクリスマスの光は、個々人を越境してあなたと私の闇に灯ります。

埴谷は続けて言います。「果てしもない宇宙の闇とてそれが単なる事実として表象されてしまえば、すでに想像力はそこで行きどまってしまい、逆にまた、新聞の片隅にのった単なる小さな「事実」とてもその背後に闇の秘密の小箱を負っていると受けとられれば、見る見る裡に、ある羽ばたくかたちの薄暗い輪郭が果てしもない変幻の裡にぼんやりと浮き上がってくるのである」。

こうした言葉、難渋なようですが親しむと案外すんなり納得でき、私はクリスマスの夜を読み解く手引きにしました。個々の「小さな「事実」」。小さな事実は一人ひとりにとっての大切な「闇の秘密の小箱」です。東方の占星術学者は小箱から「黄金、乳香、没薬」を出しましたが(マタイ 2:11)、私たちの小箱からは何が出るのでしょうか。自らの夜を進み行き、降誕した救い主を見つけて、箱を開けてみるまで分かりません。Ω